

抑留回顧（シベリア抑留メモ）

広島島 村中 汎 雄

終戦

昭和二十年八月十八日、鮮満国境を流れる豆満江を眼下に見下ろす満州の山中で、挺身斬込隊として出撃直前に終戦を知る。はじめは停戦と聞き、ノモンハン事件のような停戦で、終戦とは知らなかった。しかも、無条件降伏の終戦とは……。これでしばらく出撃はなにもとホッと、助かったという気持ちがあった。まだ軍隊機構はあり、上部からの命令によって行動するものと思っていた。

戦争の状況、ましてや世界の情勢など全然分からなかった。サイパン島が十九年七月陥落したとき、日本は負けると聞かされても本気にしなかった。それから現役兵として関東軍に入営したのであるが、これが御奉公だとただ命ぜられるまま陣地構築に励んでいた。

九月にはソ連が侵攻して来るだろうということは聞かされていた。ある夜、あちこちで爆音がし、兵士たちが自決したということを知く。それでもまだ敗戦によって捕虜になるという実感はなかった。まあ何とか成るだろうと樂觀視し、国が敗れたという悲壮感も挫折感も、軍隊からの解放感もなかった。

脱走計画

八月二十二日に間島（延吉）に収容されたので、その前日ごろだと思いが武装解除されて初めて日本は負けたのだと思ったが、これからどうなるのだろうかという不安はあまりなかった。集結のため移動するときでも、収容されるという気持ちはまだなかったが、ソ連兵に囲まれて行軍するとき、これはひょっとすると大変なことになるだろうと感じ、逃亡しようと思つた中に割り当て分担を決め、手榴弾、食料、日用品などを与えて準備したことがあった（後日、手榴弾の処分に苦労した）。

分隊の部下たちはほとんどが在満出身者なので、ある程度の土地カンもあり、馬賊の片割れくらいは平氣

な連中で話は早かった。武装解除される前、白頭山系に集結という徹底的抗戦組の誘いはあったが、その時はその気にならなかった。今回は何かしら危機感があった、なんとかしなくてはという気持ちが強かった。しかし、幹部集合で中隊長から「決して早まってくれないな。君たちは無事に内地に帰れるのだから……」と。これで決行は中止。果たしてどちらがどうであったか、神のみぞ知るで、結局回り道して日本に帰ることになった。

間島(延吉) 収容所

ソ連兵に囲まれて間島に収容される途中、奥地の開拓団から避難して来たと思われる、年寄りと頭を丸めた女性の一団に会う。「一緒に連れて行ってくれ」とせがまれたが、どうすることもできない。我々は軍隊として行動しているので、民間人まで巻き添えにしてはいけなないと断った。今から思えば、当時、民間人を保護する機関は何もなかった。せめて途中までも、一緒に連れて行ってやるべきではなかったらうかと思やまれる。無事に日本に帰っただろうか。

間島の街に入ると、道の両側から鮮人の罵声を浴びたが、投石などはなかった。この列の中に一人の満人が飛び込んで来た。「残念です。残念です」と、泣きながら当地から応召したF氏にしがみついて来る。ソ連兵に分からぬように隠しながら行進したが、この満人はFの家の使用人であった。多くの敵対視した満鮮人のいる中で、勇敢に入ってきたものだ。よほどFに恩義を受けていた者であろう。その夜収容所からFの脱走を手伝ったが、彼も無事に帰れただろうか。

ここ間島収容所は、もと一三二二八部隊の兵舎だったと聞く。丘の斜面にバラックの建物が並んでいた。我々のいた一五二六六(六四六)部隊の煉瓦造り建物と高い煙突のある兵舎が、右斜め方向に見えていたと思う。ここでの生活は、将校はいなかったが、軍隊組織のままであった。

しかし、もう演習などはなく比較的气ままな行動をしていた。馬が井戸に落ちて死んだと聞けば、すぐに飛んで行って尻の肉をえぐり取ってきた。ごぼう剣(銃剣)はどこで手に入れたか記憶にないが隠し持っ

ていた。夜になると、色の着いた照明弾が街のあちこちから花火のように上がり、戦勝祝賀をやっていたらしい。ここ収容所内では余りソ連兵を見なかった。

満人と鮮人

ここ東満の間島は満人より鮮人の多い所である。私は築城係として陣地構築に、徴用の満人と勤労奉公隊（勤奉隊）の鮮人を使用していたが、ソ連開戦と同時に勤奉隊は一人もいなくなったが満人はそのまま残っていた。解散だと、あっただけの食料と調味料をやったが、帰る道中に必要な小麦粉・塩・大豆油・干物ぐらいしか取らなかった。その夜送別会をするからと案内があった。私と通訳を主にしていた岡山県出身のKと二人で行った。

そのとき私が、「日本に帰っても、アメリカの空襲で家も無い」と冗談を言うと、吉林省から来た者だったが、「私の家に来ないか、百姓ではあるが貴方一人ぐらいは困らない」と親切に言ってくれる。短い付き合いではあったが、一種の義理堅いところがある。満人と鮮人との違いである。

徴用されて来たとき、彼らは布の満靴か裸足で、足が痛いと言いながら山路を歩いていった。これでは能率が上がらぬと、本部に掛け合って地下足袋を支給してやったことがあった。昭和十八年地下足袋は二円六十六銭で配給を受けて、これを切りのよいようにして三円で売っていた。このころ（昭和二十年）では、ヤミ値で十円もしていた。彼らは地下足袋は土産にして家に持って帰ると言って、やっぱり裸足で歩いてしたが、痛いとはもう言わなかった。

入ソ

なだらかな起伏のある草原の地沿海州クラスキノという所に着いたのは、秋の気配がする九月十九日だった。草原地帯の遮断機の国境を越えてソ連領に入った翌日、ソ連兵の「ダワイ」と「ポペアチ（五列に整列）」の声にせきたてられながら、間島を十四日に出発して六日目であった。

当時ソ連兵は二食で昼食がなかったのか、昼食時間も長くくれなかった。飯盒でやるとご飯が炊けたら、もう「ポペアチ、ダワイ」だ。歩きながら食べること

が多かった。雨の中、高粱畑の中で大幕を張って野営しながらの行進だが、まだ元気は良かった。帰国できるといふから冬の被服まで持ったので背囊は重かったが、それを背負ったまま野菜畑に入って南瓜や瓜など野菜を採りながら行った。まだそれほど我々に対して百姓の警戒はなかった。集団で行動しているので出てこなかったのかもしれない。ソ連兵もあまり文句も言わず、将校が持っていた軍刀で高粱を薙ぎ倒しながら付いて来るという状態だった。

まだ敵愾心の強いときなのに割合のん気に見受けられた。それも初めは列を乱してとりに行くので自動小銃を突き付けていたが、逃亡しないと分かったのか、我々が目的を達すれば素直に戻って来るので安心したのか、見て見ぬ振りをしていた。これから収穫の時期だというのに、我々も最後の最後まで満州を荒らしてしまつたものだ。

ソ連兵士たち

ソ連兵士は、我々の坊主頭を見て「お前たちは囚人兵か」と言ったが、彼らの第一線部隊には囚人兵が多

かったらしい。一般に程度は低く、扉のある便所に入ることがなく、我が軍の屯営に入っても、洗面所のコンクリートの上で脱糞していた。キャラメルも紙のまま食べたり、携帯用の小型石鹼を食べ物だと思つて口に入れたこともあった。戦時中のソ連は極度の物資難であつたらしい。十七歳だといふ少年兵も多かつた。

我々の入ソ経路は、間島から囚人とも、そしてもといた琿春と張鼓峰付近を通つて行つた。その間、琿春付近では、まだ戦場の整理が終わつてなく、ソ連戦車の擱座しているのが見受けられ、悪臭がすると近寄れば日本兵の戦死者であり蛆がわいていた。しかし、埋葬してやることもできなかった。相当激戦であつたらしい。

後日、ソ連兵が「ヤポンスキーソルダート（日本兵は無茶だ。爆弾を抱えて戦車に飛び込んで来る）」と言つた。『戦車肉薄攻撃』は恐れていたらしい。爆薬も戦車を破壊することはなかったが、ショックがひどく戦車から飛び出して逃げ出したり、蛸壺から飛び出すと、回れ右して後退したそうだ。

『ダモイ、トォキョ』ソ連兵の手振り身振り、何

度この言葉を聞かされたことか……。地面に船の絵を描いて「ボウ、ボウ」と船の出る真似をし、螺旋の線を描き「トオキヨ、トオキヨ」と言いながら、『我々はお前たちを連れて東京に行くのだ。東京はどんな所だ、良い所か』と聞いてくる。勿論、このころロシア語が分かるわけではなかったが、それとなく意味は通じていた。

クラスキノの原野で輸送列車を待つ間、相撲などして遊んでいるとソ連兵がやって来る。中には腕に自信があるのか、飛び入りしてくることがある。あるとき、小柄な日本兵に投げ飛ばされたことがあった。敗戦国の人にやられた場合、我々日本人ならただでは済まされないが、彼らはおおらかなものでスポーツはスポーツと割り切っていた。それからは、見物には来るが、やろうと言ってもしなかった。

こうしたソ連兵たちと、いつどこで別れたのか分かんなかったが、彼らも日本へ一緒に行く積もりでいたのではなからうか。列車に乗せられて北上中、どこかの駅で命令をもらった輸送指揮官らしき将校が腹を立

てているのを見た。「我々は日本兵を連れて日本へ行くのに、ここで代われ」と、ソ連軍の命令の伝達は、「どこどこまで行って、命令を受領せよ」となっているらしく、最終的なことは最高幹部にしか分かっていないらしい。

だまされて

十月十一日、やっとクラスキノを出発。三十トン貨車か四十トン貨車か知らないが、満鉄の貨車よりは一回り大きかった。二段棚にして何人乗ったか記憶がないが、相当詰め込められた。上段の換気孔のあるところに席を占め、外を見ることにした。車内では、皆思い思いに内地のことを話していたと思うが、どんな話をしていったかは思い出せない。

ウラジオストックから乗船だと皆思っていたらしいが、列車は東進せず北へ北へと進む。夜明けごろ霧の中に大きな川か湖らしいものを見る。興凱湖ではなからうか？ いや、そんな近くに鉄道はないと思いがらも、これで列車は間違いなく北上していると信じた。ウラジオストックは軍港だから、ニコライエフスクか

ら船に乗るんだと、まだ我々は樂觀視していた。

湿原地帯や森林の中を列車は曲がりくねって進む。

何時間か走っては信号所のような所に停車するが民家らしいものは見当たらない。そのうち、大きな操車場で何回も入れ換えして端の方に列車は止まった。丘の上に白壁の家が見える。相当大きな街らしい。ハバロフスクだと言う。さあ、列車は西へ行くか東へ進むか？

何時間が停車して出発した。昼だったか夜だったか記憶にないが、列車は間違いなく東（東北）に進行している。森林地帯を相変わらず曲がりくねって、ただひたすらに走る。カーブで列車の長さを見ると二、三十両は見えるが、森の中で全体は確認できない。後で聞いたことだが、ソ連で大きいものは機関車と何とかだと。確かに強い牽引力だ。

十月十六日早朝、列車は長いこと停車していた。

「ポー・ポー」という、船の汽笛らしいものが聞こえる。ニコライエフスクまでは鉄道が通じてないからここで船に乗って黒龍江を下るのだ。歓声があがったかどうかは定かでないが、皆そう思っていた。まだこの

時点では捕虜として強制労働させられるとは、夢にも思っていなかった。

夜が明けて下車、鉄条網と板塀で囲まれた柵の中に建物が並んでいる。正面に出入口が二カ所あって、中は板の間の広間になっている。翌日から近くの製鉄工場に使役に出る。まだ使役だと思ひ働かされているとは思っていなかった。警戒兵に囲まれて行動することで捕虜としての実感はあったが、帰国までの監視ぐらいにしか考えなかった。

コムソモリスク（コムソモリスク・ナ・アムール）コムソモリスク第十八收容所第二分所、ここで約二年、いつ帰国させてくれるのかと、不安と虚脱感で過ごした收容所だ。この付近では一番大きく、最終的には比較的设备の整った收容所であつたらしい。一棟に二箇中隊、六中隊あつたと記憶しているから一千名くらい收容されていたのではなからうか。

まだ我々はその部隊の中隊編成のまま行動していたので気は楽であった。私は、もと五中隊で間島出発の時の編成で六中隊に回つたが、ハルビン入営時の同

年兵や、集合教育の顔見知りが出て都合はよかった。将校たちとは間島收容所に收容されるとき分離されていた。この建物にはもとドイツの捕虜が收容されていたと後で聞いた。

毎日のように駆り出されて行く製鉄工場はアムール工場といい、この付近では最大規模の工場であったらしい。例の「ポー・ポー」という汽笛はこの工場のものであった。初めころの仕事は溶鉱炉に入れる屑鉄をトロに積み込む作業である。引込線の間にはドイツの戦車が山のように積み上げられている。遙かヨーロッパ戦線からよくぞ集めたものと驚く。ソ連の戦車もある。そのうち日本の戦車も姿を見るようになった。これらのガス切断したものを積みこむのである。一列に並んで一つ一つ手渡しする。あるいは戦車の中に入ってサボる。要領よく適当にやることに心掛けていた。入ソ当初は、「働かざるもの、食うべからず」によって、使役(労働)をさせられているものと思っていた。給与(食事)は最初から悪く少量であり、特に我々若い現役兵には、食べることに意地汚いものがあった。

た。それでも分隊ごとにはまとまっていた。余分に確保した食べ物も、隠れて独り食べることもあったが、大体分隊に出して皆で食べていた。まず自分の分隊だけでもという意識が強く、收容所に入ってきた糧秣を警戒兵の目を盗んで取りに行ったこともあった。まかり間違えば銃殺されるかもしれないのに、無茶なことをしていたものだと思うが、当時としては背に腹はかえられぬ境地だった。

あるとき、粉の入った袋を担いで逃げるとき運悪く見つけたが、日本の炊事係だったので、うまくごまかして逃げて事なきを得た。捕まれば吊るし上げられる所だった。またあるときは、キャベツの山が五メートルくらい積み上げられてシートが被せてあった。二班に分かれて前後から攻める。片方に警戒兵が来ると反対側で取る。こちらに来ると、あちらで取る。いちごっこを繰り返していたが、とうとう山の上から銃を向けられ退散した。主に盗んだ物は、じゃがいも・キャベツ・大豆・岩塩であった。ただ、腹いっぱい食べたい気持ちで過ごした。

ソ連警戒兵

カンボーイ（監視兵・警戒兵）の中には意地の悪い兵隊もいたが、一般的には我々と同じく人が良かった。最初はお互いに警戒し合っていたが、慣れて来るにしたがって我々ともよく話をした。当初は日本兵の逃亡を監視するのが仕事（任務）だったが、二年めごろからは工場のソ連労働者から暴行を加えられないよう監視するのが目的だった。しかし、監督や主任からは「ダワイ、ヴィストラ」とせきたてられたが、一般労働者からはそうでもなかった。カンボーイも朝工場に連れて来るとそのままどこかに行つて、夕方帰るころにならないと現れなかった。

あるとき、早く仕事が終わつたのでカンボーイを探しに行くと、工場の女と楽しくやっていて、嫌な顔をされたこともあった。またあるとき、工場の外の畑からジャガイモを取ったとき、下士官のカンボーイだったが、「日本でお前たちの家族が作ったジャガイモを、アメリカ兵が取つたらどんな気持ちがあるか」と帰る時にお説教をしたが、返せとは言わなかった。

糧秣倉庫へ貨車からの取り降ろし作業に行つたとき、連れてきたカンボーイが、「あそこの倉庫には何々がある。あの倉庫には何がある」と教えてくれる。早速手分けして取つてきた。「どうして我々に教えてくれるのか」ただしたところ「ここにはこの警戒兵がいて、ヤー・ニズナリー（私は知らない）」と。縦の系列と横の系列は全然別である。収容所の門を入るときも、グループ番号を言うと、衛兵が「糧秣倉庫に行つたんだらう」とニヤツとする。外套の下に隠した魚の干物を二、三匹やると「ダワイ」で、OKである。

ソ連労働者—ロシア人

工場内の労働者は、時間から時間までサボるといふことはなかったが、大して能率は上がつていなかったようだ。我々日本兵は、やるときはやるが、休憩が多く適当に作業をしていた。流れ作業で彼らと一緒にき次から次へと彼らの前に積み上げるので閉口していたが、技術的に見ても不器用である。日本兵の中から特技者（旋盤工・機械工など）が出るようになって、逆に彼らを指導するようになった。

作業中、配給所(売店)に行つて煙草を買つて来てくれと。そのとき、たばこは一人に一個しか売つてくれなかったが、我々日本兵が行くと一包(カートン)くれる。おまけにそのマダムと三十分くらい片言で話をして帰れば駄賃にたばこをくれる。サボるにはもつてこいだった。我々日本兵は比較的工場内を自由に歩けた。勿論、現場監督に見つかれば大目玉だが、叱られても馬耳東風ケロつとしていた。寒い時には交代交代で溶鉱炉のある建物に入って、溶融した屑鉄でインゴットを作るのを見ていた。後に休止している炉の耐火煉瓦積み修理をやらせられたこともあった。彼らソ連労働者は常に新聞紙を持っているが、読むためではなくたばこ(マホルカ)を巻くためである。名刺大にたたんでマホルカと一緒にポケットに入れている。たばこを吸おうと巻き始めると、だれかが「タバーク、ダイチェ」とねだる。ポケットの中から一掴みして、差し出した新聞紙に入れてくれる。これを巻きやすいようにならしてクルツと紙を巻き一方に唾を着けて筒状に巻きあげ、火を付ける端を中の煙草がこぼれない

ように軽くひねっておく。一人がもらうと皆がくれとたかり出す。

こうしてついには、ポケットの中をひっくり返し、両手を広げて肩をすばめ「ニエツト」と言つて、無くなるまで分けてくれる。私も捕虜になつて、食事をしない日はあつたが、たばこを吸わない日はなかつた。新聞も日本人の通訳(もと父と同じ会社に勤めていた人で、いろいろとお世話になつた)が来たときに読んで聞かせてもらつていた。日本のように読み書きのできる労働者は少なかつた。

煉瓦工場での現場監督が、自慢たらしく計算尺を見せびらかしていたので、終わりに零の付いた二数の掛け算を示すと、筆算で零の掛け算をしながら書いていた。次に平方根の付いた式を出すと「ズナイ」であつた。計算尺も日本人が持つていたもので、使い方は知らなかつたかもしれない。

ある日、工場の労働者が腕時計(日本兵と黒パンカ何かと交換したものだろう)が動かないと言つてきた。時計には詳しくないが、裏を開け調べる真似をして竜

頭を回すと動き出した。ネジを巻いていなかったのがある。これでマホルカを一包もらった。また、眼鏡の耳かけのつるが壊れて掛けていたが、それでもよいからくれというのでそれをあげて黒パンをもらったこともあった。何だかペテンにかけたような気がした。

ソ連将校官舎の薪割りの使役に二、三人で行ったとき、昼になって軒下で休んでいると(昼食の携帯用の黒パンは朝、既に食べていた)、マダムが家の中のテーブルに着いて一緒に食事をしようと言う。捕虜の身分で、彼女の家族と一緒に食事ができるとは思いもしなかった。日本では考えられないことだ。どんな料理だったかは思い出せないが、現在の献立から見れば貧弱だったに違いないが、脂っこいスープの美味しかったことは、今でも忘れられない。

その後、収容所に慰問演芸団が来て、舞台の正面はソ連兵や家族にと腰掛けを並べ、我々捕虜はその周りを囲んで立って見物していたとき、いつかの官舎のマダムが、ここに来て座れと手招きをする。駄目だと言っても、来いといって席を確保してくれる。結局は行か

なかったが、それにしても我々を差別しない気持ちには嬉しかった。今でもソ連は嫌いだが、ロシア人は好きだ。私の接したロシア人にはこんな人が多く、今から考えれば幸せだった。

所内の生活――

入ソして最初の冬ごろ、勿論コムソモリスクに來た時から既に冬だったが、だんだん兵隊の中から栄養失調と重労働のため倒れる者が出始めた。寒さも零下何十度と、満州だったら、とっくに防寒被服着用だが、大多数の者は夏衣のままだった。私は欲張って冬物を持って來たので、他の連中よりはまだましであったが、それでも骨身にこたえた。栄養不良と精神的不安、互い同士の醜い争い、おまけに着たきり雀の不衛生、虱と同居で血は吸われ、腹ペコすき腹、捕虜の身でだれに文句を言えはよいのか? 心身ともに疲れ果て、惨めな我に涙も出ず。哀れな姿乞食以上、この先何が待ち受けるやら。生か死か?

年が明けて私の分隊のMが死んだ。急性肺炎だった。しかも、このころ、所内で発疹チフスが發生し多数の

患者・死亡者が出た。収容所付きのソ連の女医は、屋外作業を中止させ、所内を改造することを命じ、二段式蚕棚のベッドを造り、壁も白く塗り、粉殻の入った藁布団を敷くようになった。この布団の中には相当量の粉が混じっていて、手箕で振って採り、水筒で脱穀して食べた。初めて手箕の使い方を教えてもらった。おまけに飯盒や水筒の防錆塗料まで削り取らされた。こうして環境整備をしたせいか、他の収容所より死亡者が少なかったそうだ。

入浴も、週に一回だったか月に一回だったか覚えていないが、浴槽の風呂に入ったのは舞鶴に上陸してからだだった。捕虜になって当分の間どうしていたか余り記憶がない。水浴びも冷たくて、洗濯はしていたが、全身洗ったことはなかったように思う。ロシア風呂（蒸し風呂）はハルビンで経験していたが、蒸気の出が悪く（初めはそう思っていた。これが当り前だった）、おまけに洗面器一杯のぬるま湯で、意気揚々と入ったのはよいが、中で震えてしまった。それからは顔や手足のみ洗うことにした。時々配給のあった石鹸は、た

ばこと交換してなくなった。それにしても、悪臭がしていたと思うのに皆、無頓着であった。便所は臭いと言うが、舎内はだれも言わない。相当体臭が染み込んでいたと思うのに……神経も麻痺していたのかもしれない。

入浴の間に衣類は熱気消毒してくれる。初めころは自分の着ていた物を束ねて出して、自分のを着ていたが、それでは完全に虱が死なないので、いつのころからか、予め洗濯消毒したものを着るようになった。入院するときでも、熱があるうが無かるうが必ず入浴させて着替えさせた。しかし、これによって虱からの苦労はなくなり、発疹チフスで死んだということは聞かなくなった。

労働

所内の大改造も済み、春らしくなって、屋外作業に出るようになったころだと思うが、今までの小隊単位の作業隊から、作業所ごとのグループ（班）編成になり、ノルマ（基準量）が課せられるようになった。私は主として煉瓦工場に行くようになった。

粘土に鋸屑を混ぜて羊糞のような生煉瓦を作り、これを乾燥室に運ぶ組、乾燥した煉瓦を窯の中に積み上げる組、焼けあがった煉瓦を窯から出す組と、三工程で一グループ（約二十名）、昼夜三交代で三グループで仕事をしていたと思う。粘土を掘り出す組と、時々煉瓦を貨車に積み込む組は別のグループであった。仕事はソ連の労働者と一緒の共同作業であり、我々がやれば彼らのノルマは上がり、やらなければ下がるとだが、余り『ダワイ、ダワイ』と言わなかった。むしろ我々に任せているようだった。六〇から八〇パーセントくらいしかなかったと思うが、彼らは彼らで別のノルマであったのか？しかし、製鉄工場ではヤポンスキーが来てから我々のノルマが高くなったとこぼしていたが。。

前に集団で貨車に煉瓦積み込みをしたとき、これだけ積むと帰してくれるかと仕事をする前に交渉して作業にかかったら昼過ぎに終わった。余りにも早かったのか現場監督は帰そうとしない。約束が違うのではないかといういろいろと文句を言ったが、なかなか「うん」と言わない。とうとう警戒兵が出て来て、作業が済んだ

のなら連れて帰ると言って早目に帰ったことがあった。警戒兵も我々があっちこちに行くので、監視できず弱って中に入ってくれたのかもしれないが？ それから後は、だんだんとノルマが上がって、我々の首を絞めるようになった。

体感温度零下百度は国境警備のとき経験したことがあり、歩哨勤務も三十分交代で長時間屋外に晒されることはなかったが、ここではそうはいかない。おまけに防寒被服も充分でなく、栄養も採れず、八時間の寒風の中の屋外作業は死ぬ思いであった。動けば動くほど、疲労は増しても、少しも暖かくなってくれない。

一応零下三、四〇度になれば屋外作業は中止ということとはあったらしいが、守られた様子はあまりなかったようだ。雪は少ない地方だが、それでも一晩に一メートルも積もったこともあった。除雪された雪が道路の両側に二メートルも積み上げられ、その雪の上手を通過して工場に通った。

大地は凍り春五月にならないと溶けなかった。短い夏と白夜、午前二時ころまで薄明るく一番楽しい時期

だが、我々には明日の仕事で寝ること以外には、食べることにダモイのことしかなかった。夏の喜びも冬の寒気の厳しさに消えてしまい全然記憶に残っていない。幸い製鉄工場も煉瓦工場も暖房があるので、道中の寒さに耐えればまあまあ我慢できた。煉瓦工場での生煉瓦造り作業は、湿気が多く暑くなって外に出ると、一二分もすると耳たぶが痛くなる。慌てて耳に手をやるとバリッと音がして凍りかかっている。鼻先を防寒大手袋で擦ると皮がむける。しかし、我々のグループでは凍傷に罹ったということはなかった。

私が班長で作業に行ったとき、分隊のSが逃亡した。O県出身の母一人子一人の現役兵だと聞いていた。カソボーイが腹を立て「お前がついていて、どうして分からなかったのか、お前を撃つ!!」と、私に自動小銃（通称マンドリン）を向ける。私も「一緒にラポート（労働）していて、ニズナイ、撃つなら撃て!!」と胸を張ったら、空に向けて五、六発威嚇射撃をした。その夜ソ連兵と一緒に当日の足取りを追って出た。要所には警戒兵が立っていて、口笛で合図をしながら

現場を回った。結局、数日後連れ戻されて来た。精神的にまいっている時でもあり、詳しい事は聞かなかった（Sと同年兵の戦友Tが知っていたらしいが）。彼も先年亡くなって、ついに聞くことができなかった。年賀状のやり取りはしていたが、そのうちにと思いついてくれた部下というより良き友達であり、誠に残念なことだ。

それから何日か経って、よその収容所に配置替えになった。懲罰大隊との噂があった。無事に日本に帰っただろうか？ 帰国先のO県の住所からは不明の葉書が戻ってきた。

（後日談）懲罰大隊に送られたと噂のあったSは満州の黒河収容所にいた（昭和二十一年二月ころ）。コムソモリスクまで一緒に来た同じ分隊で補充兵だったMが、栄養失調で我々と別れて（後で聞けば、労働不適格で集められた）、黒河収容所で奇しくもSに会った。一緒に逃げようと計画を立て、三月三日夜も一人の戦友Wと決行したが、当日Sは熱を出して加わる

ことができず残ることになった。が、風の便りではSはここで亡くなつたらしい。脱走したMとWは、途中八路軍に捕まったが比較的優遇されて、二十一年十一月佐世保に上陸した。彼Mとは再会の手紙のやりとりをしている最中の平成二年六月二十二日に亡くなった。かえすがえすも残念なことだ。(平成五年十月一日追記)

所内の生活――

私たちの中隊に、広沢虎奴(浪曲師・真偽のほどは不明)という元伍長(スターリン進級かもしれない)が転属して来た。毎朝ベッドの上で『アアー!!アアー!!』と発声練習をする。うるさくてしようがない。喉は相当痛んでいたが、芸人の意地か熱心に続ける。夜は虎造節を聞かせて、楽しませてくれるので重宝していた。同じ建物の隣の中隊にも、玄人顔負けの芸人がいて浪花節を聞かせてくれる。浪曲は余り好きではなかったが、聞くとはなしにベッドの上で聞いていたが、しまいには明日の続きが楽しみになりだし、通路(廊下)に出て聞くようになった。

『紀の国屋文佐衛門のみかん船』の長編の語りが記

憶に残っている。今でいうのど自慢のようなことは、余り宿舎ではやっていなかったように思う。入ソ当初は、景気付けのため舎前で軍歌演習などもやったが、いつの間にか止めてしまった。そんな元氣もそんな氣持ちにもならなくなった。そのうち民主化運動が始まって、否応なしに「赤旗の歌」「メーデーの歌」「インターナショナルの歌」を歌わされるようになった。

軍隊というところは、結構いろんな器用な人が集まっているものだ。木工場から白樺の切れ端を持って帰っては、麻雀牌や将棋の駒、碁石まで作り我々を楽しませてくれた。彫りもするし碁石の黒は医務室から薬品(名前は忘れたが)を取ってきて染め上げた。麻雀は満幣や鮮幣を賭けて気分を出していた。十円紙幣が多かったが、一晚で二、三千円は稼いだ連中もいた。花札はオイチョカブや六白金が主で、食べ物賭けていたようだ。私も部下に将棋を教えてやったが、しまいには私より強くなった。こうした娯楽も、体力の衰え(空腹と栄養失調・仕事の厳しさ)と精神的不安(ダモイの可否)と、そんな余裕もなくなって、いつの間

にか遠のいた。

所内生活も落ち着いてきて、毛布でグローブやミットを作り中隊対抗で野球もやった。石油缶を叩いての応援。ソ連兵も来て見物するがグラウンドの中に入って応援する。ソ連では野球はやっていないらしい。サッカーは時間後練習をしているのをしばしば見た。あるとき、試合らしからぬ試合をしたことがあったが、我々のどた靴では全然歯が立たず、レベルも段違いであった。この中の兵士の一人がカンボーイとして私のグループに来たとき、昼食後、飯盒を洗えと言って、スープを半分残してくれたことがあった。しかも、私は図々しくもジュラルミンのスプーンまで強引にくれと言ってもらった。このスプーンは日本に持ちかえったが今は手元にはない。

抑留中の我々の話題と云えば、当初はそれぞれのお国自慢に花が咲いたが、食べることに帰国のごとが一番だった。どちらが先かと言えば、現役兵と召集兵とは差があったと思うし、また同じ現役兵でも在満者と内地の者とは違っていた。私たちが在満現役兵は、

大陸に骨を埋める覚悟で来ていたから、帰ることより食いが第一であった。軍隊時代からそうであったが、口に出して言えない意地汚いものがあった。食事が喉を通らぬ病人が出れば内心喜び、他人のパンを盗み、量が多いとか少ないとかでいがみ合い、自分さえよければよいという風潮が強く、醜い争いもしばしば見受けられた。今から思えば情けないことであった。

休憩して座り込むと「ああ、腹いっぱい食べたい」「ああ、早く帰りたい」と、思わず口に出る。ぼた餅とおはぎ、ぜんざいと汁粉の違いはどうだとか、味噌汁の美味しい作り方とか、じゃがいもの料理法は、はたまた蛇や蛙は美味いとか、生つばが出る話ばかりだ。蛇は気持ち悪かったが鼠は美味かった。たまに腹いっぱい（実際は腹半分、お茶も含む）食べたとき、やっと色気話が出る。応召者の話に目を輝かすが、元気は出ない萎れたままだ。

給 与（食事）

所内もだんだん改革され、食事も食堂で食べるようになった。それまでは炊事場から中隊ごとに受領して

分配していた。当初は鷲のマークのついたUSAの缶詰（この空き缶は食器として利用した）が多く、そのうち満州から取ってきた糧秣になったが、高粱・燕麦が主で米は少なかった。献立も黒パンと大豆の少々入った薄いスープ、箸にかからぬお粥から、いろいろ工夫され、量は少ないながらも多彩な料理が出るようになった。お茶も献立の中に入れて、その日その日の献立表が掲示され、品数も五、六種類あったのではなからうか。

こうしてある程度改善されても、並んで食事を受け取る時、パンの厚いもの、汁の実の多いものに当たるようにと、相変わらず目を輝かした。ノルマ食が出るようになって増配されるグループもあったが、我々は相変わらずであった。砂糖は少量ながら個人にも配給があり、葉包のように新聞紙に包んで、ちびりちびり舐めていた。私はたばこと交換していた。

話は飛ぶが、USAの缶詰にしろ自動車にしろ、戦時中アメリカはソ連に対し莫大な物資援助をしていたものだ。まず武装解除のとき、乗って来たジープとト

ラックがUSA、途中で擦れ違う自動車は全てUSAだった。戦車だけはソ連製だった。おまけに我々捕虜に食わせるほどの缶詰があるうとは……当時ソ連も食糧事情が悪かったはずなのに。

また食べる話に戻るが、冬の間ビタミンCの欠如により壊血病らしい症状が出る。壊血病は船乗りが罹かる病気だと思っていたが、陸地でも罹かる。暖かくなると野草採りをする。中には毒草を食べて死亡する者も出る。私も蕨を塩揉みして食べたが、アク抜きが十分でなく中毒を起こした。仕事に行かなくてよかったが死ぬ思いであった。

夏の終わりに胡瓜とトマトの樽漬けをさせられた。仕込み樽のような大きい樽に塩を撒きながら、ベルトコンベヤーで運ばれて来る野菜を入れるのであるが、生育が悪く小さな胡瓜や青いトマトばかりだ。たまには赤味をしたトマトが届く。早速頂戴して、ロシア漬けはビールのつまみによかったと思いつながら食べた。

何を原料にして発酵させたのか、『ドロジ』とかいうどぶろくを作った者がいて、飲ませてもらったこと

もあつた。酸っぱい味だったが、ほろっとした気分にもなつた。なかにはどこで手に入れたのか、イースト菌を取ってきてパンを焼いた者もいる。これは毎日食べている黒パンよりはるかに美味かつた。パンを焼く粹も製鉄工場でちゃんと溶接して造つてきた。不自由な生活の中にもいろいろのことを考えるものだ。

捕虜通信

現在、私の手元に三通の『俘虜用郵便葉書』がある。二通は(往)で一通は(復)である。いつごろからの葉書が出せるようになったかは覚えていないが、一番最初に出したのは病死したMの家だつた。この返事はシベリアで受け取つた。他の二通(往)は私の家に出したもので返事は受け取らなかつた。一通には「突然のお便りさぞ驚きの事と思ひます」とカタカナで書き始めて、簡単に元氣でいることを知らせたものであり、次の葉書は「停戦以来既に二年……この便りの着くころは、もみじのころか、既に散つてだんだんと寒くなり始めるころ……」と同じくカタカナで書いているところを見ると、二十二年の七、八月ごろに出したも

のらしい。「帰国の日を、氣長に例ののんびりさで待つています。一日も早く帰りたいのはやまやまなれど……」とあるから、このころは大分收容所の生活にも慣れて、やっと落ち着いてきたころではなからうか？ この葉書を追い駆けるようにして、私は帰国した。

民主化運動

『日本新聞』は相当早くから読んでいたと思う。ソ連(ソ同盟といつた)の宣伝紙とはいひながら、活字に飢えていたので、一通り目を通していた。そして最後がたばこの巻紙となつた。ソ同盟の偉大さの宣伝には嫌気がさしたが、資本主義とか共産主義と社会主義との違いとかの記事は、非常に興味がわいて大参考になつた。我々の若い時に『二十になつてアカにかぶれないやつは馬鹿だ。三十過ぎててもまだかぶれているやつは大馬鹿だ』という言葉があつたと記憶している。大なり小なりこうした思想に関心を持つ年代であつた。折角ソ連に來たのだから勉強してみようと言へば大げさ過ぎるが、こういう研究心は大いにあつた。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、いや応なしに

思想教育を叩き込まれたが、うわべだけであったのではなからうか。

所内で、《青年共産同盟》というグループが結成されたとき、進んで参加してみた。どんな人から教えてもらったかは覚えていないが、ハバロフスクで教育を受けて帰って来たと言いたが弁論調で喋るばかりで、今から思えばたいした思想教育を受けていたとも思えない。帰国までの方便であったかもしれない。我々もつけ焼き刃式で社会主義と資本主義とに分かれて討論会をしても、資本主義が勝つ始末だ。三十過ぎの実社会を経験した人々の方が、我々の生半可な理論より説得力があった。

私たちの収容所は比較的早くから民主化運動が始まり、所内の空気も和やかになってはきたが、最大の関心事は帰国であった。これを利用してのアクチブ（活動家）の醜い手段には、内心腹が立ったが、表に出して口に言えない。反動と烙印を押されると帰国できなくなるからだ。スパイ的な人がいて日本人同士の間が起きる。日本人が日本人を苦しめる。だんだん人を

信用しなくなり、二重人格者が生まれる。

かわや（廁―使所）

臭い話だが、所内の大便所は長方形に深さ一メートル半くらい深く掘って、それに板を並べてアンペラで囲っているが、夏場はよいが厳冬期になると凍って円錐状に盛り上がり、石筍のようになる。小便のほうも溝を掘っているが、地面に着くとすぐに凍り、つるつると滑るので、だんだん後退しながら用をたすことになる。急いで便所に行き、氷の針で尻を刺されたとか、滑って転んで漏らしたとか、笑えぬ悲劇も多々あった。こうなると使役が出てバールや鶴嘴で取り壊すのだが、匂いは無い。しかし、舎内に戻ってからが問題だ。寒いところから帰ったので、すぐにベチカにあたる。飛び散った氷塊が溶け出す。たちまち悪臭が部屋中に充満する。窓も凍り付いていて開かない。そのうち慣れて気にしなくなった。

埋葬

春になって、靈安室の遺体を埋葬する使役に出された。冷凍したマネキン人形のような遺体が、裸のまま

積み上げられている。中には解剖されたのか、針金で切り口を閉じられた者もいた。何体あったかは記憶にないが、これらを針金で腕などに引っ掛けてトラックに積んだ。埋葬場所は林の中の広い所に深い壕（二メートルくらい）が掘ってあったように思う。この壕にまた針金で滑り落とした。このときは、まだ埋め戻しはしなかったように思う。悲憤の涙が溢れ、明日は我が身かと、死者の心情を察し、さぞかし無念であっただろうと、冥福を祈らずにはおられなかった。

入院

私は今日まで、手術台に六回上がったが、その内二回がシベリア抑留中であつた。一時的に労働から逃れようとする気持ちはあつたが、その発病が、暖かくなり始めたころになってからである。冬の間の体力消耗と、ろくに栄養が採れず心身共に疲れ果てた時に起きている。一回（昭和二十一年五月）は結核性の淋巴腺炎で、このときは分所内の医務室に入室して手術を受けた。ソ連の女医は手術しようとしなかったが、日本の軍医はこれは簡単であると施行した。術後「とうと

うやったか」と女医が言ったが、結核性の病氣は嫌がっている様子だった。

二度目（二十二年三月）は鉄条網の柵で仕切つてあるが二分所と続いたコムソモリスク地区中央病院である。このときは、労働拒否の気持ちが強かつた。耐えられぬ痛さではないが、大げさに痛いと言つて入院した（そのまま我慢していたら、果たしてどうなつていただろうか？）。脱腸だといつて、少佐の院長と少尉の女医（今でいうインターンだろう）が手術した。手術中「チト・カーク」（何か？）と言ふ言葉が耳に入ってくる。腹の上では、何やらゴム毬か風船のようなものが踊っている。後で日本の衛生兵に訊くと、腸を引っ張り出していたそうだ。日本の軍医の時は安心感があつたが、このときは実験されているような、心細い心境であつた。

普通ならば、術後一週間で退院できるといふが、その晩から一人で便所に行つたり不潔だったのか抜糸すると化膿して口が開いていた。結局この病院に二カ月いた。充分休養させてもらった。元をとつたような氣

持ちになる。

給与は良いし、逆にいうと労働している時より遥かに良い。量は相変わらず少ないが黒パンは白パンに、カーシヤ（お粥）もさらさらでなく箸に引っ掛かる。それに脂気の料理がしばしば出る。ミルクも飲んだような気がする。まさに病人天国である。

何とかして仕事を休もうと診断を受ける者が多いが、発熱（軍隊では熱発）も三八度以上でないと病氣と認めてくれない。ペチカに体温計を当て四〇度になって慌てて振り下げている者もいた。特に神経痛の者は氣の毒だ。日本の軍医は病氣だと言うが、ソ連の医師は駄目だと。「寒いから神経痛が出たというなら、ソ連の人は皆神経痛だ!」熱があるか、外傷があるかでなければ、病氣となかなか判定してくれない。私も紫斑病らしきものになって、膝関節を曲げると痛かったが、日本の軍医は「若いのにリュウマチでもあるまいに」と言いながら休ませてくれた。もしソ連の医者が側にいたら「ラボーチ（働け）」だったろう。

毎月だったか何月に一回だったか、身体検査がある。

ソ連の女医の前に素っ裸で立つ。羞恥心も何もない。腹と尻の皮をつねり、肋骨が見えているかどうかで労働等級を決める。一級二級が屋外作業、三級が所内作業、四級が病人であったと思う。せめて三級くらいにと腹をひっ込めてみても肋骨は出ない。栄養失調気味になると腹は出っ張り全身むくんだようになる。これでは病人と認めてくれない。

再入院

昭和二十二年八月二十八日、またまた中央病院に入院する。入浴の前だったか後だったか記憶にないが、すぐに診察だという。変だと思いつながら診察室に行く。どんな顔触れであったかは知らないが、何だか物々しい雰囲気がしていた。例によって裸で立っていると、ソ連の女医が何とか言ったが、その意味は分からなかった。それから病室に案内される。右頸の手術跡が化膿して切開しているのに、何の治療もしない。汚れた包帯を巻いたままであるのに、ザルプロの注射のみである。げんな顔をしていると、同室の者か衛生兵かだれかが「貴方は幸運だ。入院してすぐダモイの検査を

受けられるとは……」初めてその意味を知り、女医がどう言ったかが気になりだした。ダモイの組に入ったのだろうか、どうだったのか？ しかし、まだ帰りたくないと言えば嘘になるが、二分所にいる連中を置いて先に帰る気にもならない気持ちもあった。連絡のため病院と二分所の境の柵に来ていた丁に「済まないが、ダモイになるらしい」と言ったことは覚えてる。

こうした結核性患者は集団生活においては特に嫌われる。ソ連では甚だしい気がした。ろくに診察しようともしない。日本の軍医に任せたままだ。治ってもたいたした労働力にならないからだろう。私にとっては幸いした。

九月九日、帰国のため出発。私もその組に入っていた。洗濯済みのソ連兵の上衣をもらった。担送患者はトラックで行ったと思うが、我々軽患者は徒歩で駅に行った。例によって貨車に詰め込まれる。何回か入れ換え連結して、その日に発車した。入ソの時の不安感はないのに、車内でどうしていたか全然記憶がない。入院して間がなかったので、親しい友達もいなかった

せいかもしれない。周りは歩けるといっても私よりは重症に見えたし、寝るしか楽しみがないのか、ただ横になって黙ったままだったし、こうした患者の面倒を見ていたのではなからうか？ ナホトカにいた間一度も使役に駆り出されることがなかったから……。

ナホトカー乗船

昭和二十二年九月十三日、ナホトカに到着。海岸に設置されたテントに入る。第一収容所だという。渚の砂浜で湾の入口を眺め、船の出入りするのを見つめていたことは覚えているが、周りの景色がどうであったかは思い出せない。後はなだらかな起伏の丘が続いて岩山の禿げ山があり、丘の上や谷間には民家や工場、農場があったというが、覚えていない。我々は月に一回入港する病院船を待つことになる（記録によればこのころは月に二回運航していた）。

病院船待機組というせいとか、激しい民主化運動の成果を追及されることもなく、ましてや吊るし上げのこともなかった。私が毎日民主グループに行って『日本新聞』をもらってきて、皆に今日の出来事として主

な記事を読み聞かせるくらいのものであった。しかし、軽患者には時々使役があった。重症患者はどこにいたかは知らない。毎日毎日、海を見つめて病院船の入港を待つ日が続く。この間一般の引揚船は次々と入り、我々待機組はやるせない思いをした。

いよいよ帰国につながる第三收容所に、第二を飛ばして行くことになったのは十月も中ごろであった。この收容所でいろいろ注意事項や帰国後の話があったはずだが、もううわの空で聞き流し、何日いたかも覚えていない。

十八日、待ちに待った乗船の日、收容所を出るとき、税関らしい所持品検査がある。度々、所持品検査があったので、特別な禁制品は既に持っていなかったが、ソ連のコインとメモした住所録はうまく持ち帰ることができた。埠頭には薄汚れた、赤十字のマークを付けた船が横づけになっている。確かに我々の乗る病院船だ(高砂丸)。しかし、余り感激も感動も湧いてこない。騙しに騙されて、仮面を被って、人を信用しなくなり、自己本位な人間に作り変えられて仕舞っていたのかも

しれないし、成るようにしか成らないと、悟りきっていたのかもしれない。

担送患者から先にタラップを上がる。続いて我々が上がり、甲板で出迎えの看護婦さんの声を聞く。長いこと日本の女性の声を聞いていなかったのか、『コクロウサンテシタ、コクロウサンテシタ』と朝鮮人の声に聞こえて仕方がなかった。最上部のロビーに畳が敷いてある部屋に落ち着く。三面が窓で見晴らしは良いが、安堵感と畳の感触に皆横になってしまった。いつ出航したかも分からないが、岸壁ではソ連の人たちが手を振ってくれていたであろうに、それにこたえる気もしなかった。

乗船して間なしに嫌なデマが飛んだ。『これから我々はアメリカの捕虜となって、アラスカに連れて行かれるのだ』と。いつまで経っても捕虜の気分が抜けない。あれほど騙しに騙されたので、猜疑心が強くなっている。

明ければ日本海は荒れていた。船底から味噌汁の樽を担いで戻って来ると三分の一はこぼれ、上半身は汁

だらけになった。食事も残飯が出る始末だ。私も胃袋が小さくなっているのか二人前も食べられない。勿体ない話だ。

水平線が見る見るうちに上がって見えたと思うと、船首に波を被る。逆に水平線が下がったと思うと波の山に乗る。物凄いピッチングだ。その上ローリングも凄い。船酔いが多数出るのも無理はない。台風の余波とかで、丸一日半、荒れに荒れていた。

舞 鶴―帰国

二十日早朝、船は波静かな湾内に停泊した。舞鶴湾である。明るくなって湾内を見る。山が海まで迫っている。今までの大陸のただっ広さに比べて何とせせこましいことよ。どこを汽車が走っているのだろうかと疑う。しかし間違いない日本の山々であり、岬である。やっと帰って来た実感が込み上げてくる。

九時ごろ港の方からランチが来る。アメリカ兵が乗っている。一瞬ハットする。まだ警戒心が残っている。一人苦笑いする。一人一人身上調査を受ける。まずたばこをすすめてソ連でのことを訊く。「あそこの煉瓦

建ての建物はどこまでできましたか」とか、そう言えば毎日工場に通う道中に日本人が働かされていた建物があったことを思い出す（この煉瓦も我々が作ったものだ）。地区ごとにいろんな情報を帰国者から集めているらしい。我々よりよく知っていた。

昼が過ぎてもなかなか迎えのランチは来ない。皆いらいらし始めていた。そのとき、甲板から海に飛び込んだ患者がいた。精神異常者と聞いたが、そうでなくても皆そんな気持ちでいた。デマを信じる者も出る。夕方、まだ明るさは残っていたがやっと上陸開始。例によって担送患者から始まる。私が上陸したころはもう薄暗くなっていた。栈橋の様子はどうであったかは記憶にない。トラックに乗せられて行く道の両側には名前を書いた幟が立っていたような気がする。国立舞鶴病院に到着。直ちにDDTを体中に振り掛けられて講堂に集められ、所持品検査を受ける。ここで分厚い『共産党小史』（ソヴェート同盟共産党（ボルシェヴィキ）歴史小教程）は没収されたが、その他は異常なし。久しぶりに、本当に何年かぶりかで浴槽につかり、

のぼせて水を掛けたことを覚えていた。翌日、裏の山合いに行く。柿がたわわに実っている。日本は秋だ。松の緑の間に黄色く色づいた雑木林が、暖かな陽射しに輝いていた。農家にて柿とさつま芋をもらって帰る（もう黙って盗るといふことはしない）。私たちの病室の隣は産婦人科だったので付添いの七輪の残り火をもらって芋を飯盒で蒸かす。胸につかえてむせる。ジャガイモを生で嚙っていたところに比べ、何と美味しかったことよ。

診察やら調査と帰国手続で慌ただしく一週間は過ぎ、二十六日転院のため復員列車に乗る。大阪駅にてたばこ（ピースかコロナ）を買おうと値段を聞くと三十円、三百円しかもらっていないのにとびっくりする。夜中に三原駅を通過。夜目にも、線路の両側に家が見当たらない。空襲でやられたと思ったが、強制疎開させられたそうだ。早曉まだ暗いとき人竹駅に着き、国立大竹病院に転院した。

ここでやっと家に手紙を出す。早速、親父が会いに来てくれた。四年半ぶりであった。入院していると聞

いて重症だと思ったのが、ピンピンしているので安心して帰った。結局、回り道して、我が家に落ち着いたのは翌昭和二十三年八月五日であった。

あとがき

特に、あの時はどんな気持ちであったかと聞かれても、即答できないことが多い。夢遊病者であったのか、諦め切っていたのか、悟りきっていたのか、今でも分からぬ。

シベリアでの抑留生活と言えば、寒さとの闘いしか記憶に残っていないが、生と死の境で死に近い方について、屈辱と悲惨などん底の生活の中に、人間の生に対する本能の強烈なものを感じた。知らず知らずのうちに生に対する執着。つらくて死んだ方がましだと言いつながら、なおかつ、生きようとする人間本来の本能。恥ずかしながらと、捕虜（奴隸）になった屈辱感も劣等感も耐えに耐えて生きてきた。自覚して行動することなく、自然に身に付いてきた。後から考えると要領が良かったと言われないこともないが、私は運が良かったと思っている。よくぞ生きて帰れたものだ。

【執筆者の紹介】

大正十三年（一九二四）十一月二十四日生まれる

昭和十八年（一九四三）四月 農業土木技術員として

渡満

濱江省防水開発事業局に奉職、開拓団入

植地並びに入植予定地の土地改良工事に

従事

昭和十九年（一九四四）十月 現役兵として現地入宮

二度転属して満州第一五二六六（六四三〇）

部隊（間島）で兵科乙種幹部候補捕生（階

級伍長）として終戦を迎える

昭和二十三年（一九四八）十二月 国鉄に就職、主と

して工事畑（土木関係）を歩く

昭和五十五年（一九八〇）四月 国鉄を定年退職

軍隊から

シベリア抑留まで

岩手県 金野 秀雄

出生から入隊まで

寒村で育った私は、元氣だけはだれにも負けないほどの腕白小僧で、よく上級生と喧嘩をしたものであった。しかし、家が貧しいだけに家畜の世話は勿論、田んぼや畑に出て、両親の手伝いをし喜ばれた親思いでもあった。

昭和十二年に支那事変が勃発し、間もなく義兄が召集になり、山西省太原の戦場で戦死したとの公報が入り、子供ながら考えさせられたのである。

南京から徐州、そして漢口へと連戦連勝の報に国民は沸き立ち「欲しがりません 勝つまでは」と、文字どおり国民総動員の戦時体制であった。義兄のこともあり、私も志願しようとしたが親に反対され、やむな